

# 中国四国農政局長賞受賞

交流活動と情報発信で、地域に人を みんなを元気に  
～農地を守り支えあう暮らしの実現～

おおしお ち く  
受賞者 大潮地区

しゅうなんし  
(山口県周南市)

## ■ 地域の沿革と概要

平成 15 年に 2 市 2 町が合併して誕生した周南市は、山口県の南東部に位置し、南は瀬戸内海、北は中国山地を背に標高 400m 近くの農山村部が広がり、起伏に富んだ地形である。令和 4 年 1 月現在、6 万 8 千世帯、人口 13 万 9 千人が暮らしている。

臨海部に大規模な工業地帯、それに接して東西に平坦地がのびて市街地を形成し、北側には山地が迫っている。山間部には市の総面積の 85% を占める農山村が広がっている。

交通網は、縦横に国道が走り、それを結ぶように県道・市道が発達している。

鉄道は、J R 山陽本線、岩徳線、山陽新幹線が通り、交通の便は良い。

海運では、徳山下松港が整備され、特定重要港に指定されている。

農業は、農家戸数 3,190 戸で、農家一戸あたりの耕作面積は 46a と小規模である。主な作物は水稻だが、温暖な瀬戸内海沿岸から冷涼な山間地域まで幅広い自然環境のもと、野菜、花卉、果樹と多様な農産物が生産され、都市部に近接した利点をいかした販売が盛んである。

第 1 図 位置図



## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

大潮地区は、市街地から北西に 30 km 離れた旧鹿野町の中心部から、更に 9 km ほど山あいの、市の最北部に位置し、島根県と県境を接している。弘法大師が訪れた際に、辺り一面が青い海になったとの言い伝えが残ることから、海からは遠く離れているにも関わらず「潮」の字を頂いた地域になったと云われている。

平成 15 年の合併で市の末端地域となったことも影響し、過去 15 年で高齢

化率が20%以上上昇して77%を超え、高齢化・過疎化が加速している。

冬は、1m近くの積雪となるなど厳しいものの、錦川の源流が流れる山紫水明の地で、地区を縦断するように国道315号線が通り、周南市街地までは車で50分程度である。

大潮地区の農業は、水稻を中心にりんどう・トマト・わさび等が生産されているが、生産者は減少し続けている。

## 2. むらづくりの基本的特徴

### (1) むらづくりの動機、背景

#### ① 朝市の立ち上げと「大潮田舎の店」の設立

平成元年、地区を通る県道が国道に昇格し、交通量が増えたことを受け、「朝市で都市との交流を進め、賑わいがある地域にしたい」との思いから、地区の女性有志20名が朝市「大潮田舎の店」を開設した。



写真1 開設当初の「大潮田舎の店」

平成13年に、生きがい発揮促進施設「大潮田舎の店」の建設が決まり、翌年4月には、直売所、加工室、研修室、トイレ等を備えた施設としてリニューアルオープンした。

#### ② 都市農村交流への期待感の高揚

朝市販売部、農産加工部は軌道に乗り、平成15年に交流部が始動した。交流部は、食文化伝承のため、地元中学生を対象とした豆腐づくり体験や、休耕田でのソバ栽培等を実施した。また、「食と緑の発見ツアー・イン大潮」と銘打って、年間4回の都市農村交流活動を実施した。ツアーは好評で、終了後も継続して大潮を訪れたいという都市住民の発案で、「大潮ファンクラブ」が結成された。

平成17年、ファンクラブ会員と地元が本音で話し合うためのワークショップを実施した。この時、純粋に大潮地区を支援したいという思いを持った都市住民と語り合ったことで、交流活動に対する地区内のモチベーションが上がり、活動を通じた活力向上への期待が高まった。

第2図 地域ビジョン



### ③ 地域存続に向けた地域ビジョンの策定

活動が続ける中で、交流活動を田舎の店の一事業ではなく、多くの住民がかかわる活動体制にする必要性が感じられるようになった。そこで、地区にある団体の役員や関係機関で「大潮地域づくり活動検討委員会」を設立し、地区の将来を描く「地域ビジョン」の策定に取り組むこととした。

検討委員会では地区内7集落で地域資源点検を行い、今後の活動を協議した。役員はビジョン案を携えて全集落を訪問し、ビジョンを策定する趣旨や素案を説明し、それに対する意見を集約した。取組の意義が徐々に理解され、住民の意向を反映した「大潮地域ビジョン」と、ビジョンを実現する「地域行動計画」が完成した。策定にあたって、全戸に理解を求めるステップを踏んだことで、全戸参加型のむらづくり体制が整ったと言える。

平成22年、「大潮地域づくり活動検討委員会」は「大潮の里をまもる会」となり、住民総参加型のむらづくり活動を開始した。



写真2 「大潮の里をまもる会」設立総会

### (2) むらづくりの推進体制

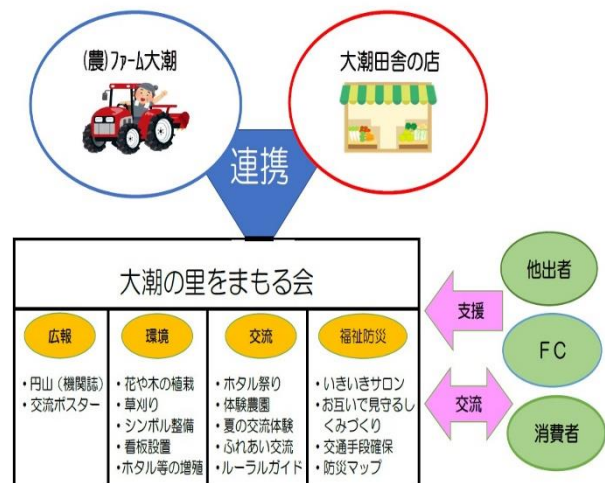
現在、地域ビジョンの推進を図る「大潮の里をまもる会」、地域経済の中心となる「大潮田舎の店」、地域営農の中核となる「(農)ファーム大潮」が相互に連携してむらづくり活動を展開している。

「大潮の里をまもる会」が中心となり、活動費の捻出、むらづくり活動の企画立案、スケジュール調整、情報発信等を行っている。

会には女性理事を置き、女性の発想や、暮らしに根付いた考え方や、行動力を積極的に取り入れている。また、「広報」「環境」「交流」「防災・福祉」の4部会を置き、住民が役割分担しながら、それぞれの能力をいかした活動を担う体制となっている。

第3図 むらづくり推進体制図

#### 大潮地区の地域運営のめざす姿



他出者、FC、消費者との支援と交流が行われている。

## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

#### ア 目的に応じた実行組織の編成と地域ビジョンの作成

過疎・高齢化と地域の衰退への危機感が高まる中、女性有志による朝市活動を皮切りに、地域活動が内発的に発展した。これに合わせて、目的に応じた組織を設立し、互いに連携させることで、地域が抱える課題に様々な角度からアプローチできる体制を整えた。これは、地区全戸がむらづくりにかかわる機会の創出へとつながり、地域を支える人材育成と活力創出に貢献している。

#### イ 地域特性を活用したビジネスモデルの確立

農業を主産業とする当地域では、農外収入を得る機会は限られ、若い世代は仕事を求めて市街地へ流出する傾向があったが、女性達が朝市を立ち上げ、「大潮の里をまもる会」と協力しながら、地域ビジネスとして定着させた点は女性の社会参画と併せ、評価すべき点である。また、良質米地域として知られる当地域は、平成初頭頃から高齢化に伴う農業後継者の不足が深刻化したため、基盤整備事業や営農組合の設立・運営などに取り組み、平成 23 年に、地域農業の受け皿となる農事組合法人ファーム大潮が設立された。

#### ウ 交流活動から発展させた関係人口の創出

大潮地区では朝市活動を契機に地区外との交流を始め、都市住民、他出後継者など、様々な外部人材の協力を得ながらむらづくり活動を展開し、開放的な農村を実現した。

地区住民に対しても、ビジョン策定のための度重なる話し合いや、「集落点検活動」等のワークショップを実施してきたことで、一人一人が活躍する場を用意することに成功した。住民総意によるむらづくり活動を展開している点はモデル地域として高く評価できる。



写真3 集落点検活動の様子

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 物流・交流拠点である「大潮田舎の店」の発展

平成 14 年の開設以降、朝市販売部・農産加工部・交流部の 3 部会が連携し、年間約 200 日稼働している。高齢化に伴い、会員数は減少しているものの、毎年 1,500 万円前後を売り上げ、地域経済の活性化に貢献している。

また、店舗では地元の農林産物の販売の他、加工品や弁当、総菜の原料も地元農家から調達し、地域経済の循環を生んでいる。主力である「せせらぎ豆腐」は、年間2万丁近く製造し、JA直売所や学校給食等にも出荷しているほか、近年人気が高い「油揚げ」は年間2万枚を製造し、予約販売の状況である。これらの商品は、「しゅうなんブランド」の認定を受けるなど市民にも親しまれている。「『大潮田舎の店』無くしてむらづくり活動無し」と言えるほど、店が地域の経済、物流、交流の拠点（へそ）となっている。

## （2）農地をまもる仕組みの形成～（農）ファーム大潮の誕生

当地域は良質米地帯とされ、農地保全に向けて集落ごとに集落協定を取り決め、営農を維持してきたが、平成初頭頃から高齢化に伴う農業の後継者不足が深刻となり始めた。

平成19年に地区の基盤整備事業が完了したことなどから担い手育成が急務となり、同年10月に受け手となる上大潮営農組合が設立された。

そのような状況で、「大潮地域ビジョン」に「農地を守る営農のしくみづくり」が位置づけられたことで、更なる営農体制の強化を目指して集落営農法人設立に向けた協議が開始された。会では営農アンケートを実施し、協議母体となる「集落営農法人設立検討会」を設置した。

その結果、平成23年、大潮地域の農業・農地を守り、地域農業の活性化に貢献することを基本方針とする、農事組合法人ファーム大潮が設立された。

法人の設立により農地の受け皿が整備され、経営面積は徐々に拡大し、地区外に居住する若い世代が法人作業に従事するようになった。更に、生産した米の一部は、大潮田舎の店に出荷し、加工原材料としても活用されている。

## （3）新規就農者の受入

周南市では平成28年度から、「新規就農者パッケージ支援制度」を開始した。大潮地区で就農を志す2名は、就農にあたって苦慮していたが、「大潮の里をまもる会」の積極的な協力により、地区内に農地や住宅を確保することができた。

その結果、2名の新規就農者が「夏秋トマト+わさび」経営を開始した。就農後は、地元で融和できるよう、地域行事への参加を呼びか



写真4 法人作業に従事する新規就農者

けるとともに、田舎の店では新規就農者が育てたトマトの加工品開発や販

売を行うなど、新規就農者に寄り添った支援をしている。就農者も地元行事へ積極的に参加するほか、法人の水稻の育苗管理や、農閑期に大潮田舎の店の加工に従事するなど、地域に定着している。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 集落協定の一本化による活動資金の確保

平成 12 年に始まった中山間地域等直接支払制度により、地区内 7 集落が個別に集落協定を締結し、10 年間にわたり活動を継続してきたが、高齢化が進み、協定の継続が困難な集落も出始めた。これを受け、平成 22 年には「大潮集落」として一協定に集約し、一元的に集落機能の維持を図るよう組み変えた。その際、交付金の 20% を「大潮の里をまもる会」の活動費に繰り入れる方式としたことで、資金面で会の活動を支えた。協定の範囲は小学校区内と同一になったことから、元来同郷の念が強い住民同士の結束と共同活動を助長した。

#### (2) 応援団確保を狙った情報発信

平成 16 年から発行している情報誌「円山」では、地域で開催したイベントの様子、名所旧跡、「お達者さん」と呼ばれる高齢者の紹介、フォトコンテストの結果等、その時々々の旬の話題を発信しており、活動の意義や成果を住民と共有し、住民自身の活動意欲を高めることに貢献している。

「円山」は年 2 回、300 部ずつ発行し、地区住民はもとより、大潮ファンクラブ会員（約 30 人）、他出後継者（約 40 人）等へも郵送する他、ホームページやフェイスブック等にも掲載し、大潮に興味を持つ人が誰でも情報に触れることができ、「心のふるさと」として認識させることに一役買っている。

#### (3) 地域で過ごす誰もが快適に過ごせる環境づくり

花木（桜、ヒガンバナ、シバザクラ等）の植栽や、年間延べ 100 人による県道・国道沿いの草刈り、地区のシンボルである「円山」や「弟見山」の登山道の整備、名所・旧跡の案内看板の設置等を実施し、訪れる人が快適に過ごせる環境づくりに取り組んでいる。美しい農村を見るために大潮を訪れた人が、SNS で発信すると、更に新たなファンやリピーターが増える状況で、地道な活動が来訪者確保につながっている。



写真 5 シバザクラの植え付け

#### (4) 都市農村交流活動の促進

大潮の自然の豊かさを活かした祭りや、交流イベントを定期的に開催している。

特に、毎年6月に開催する「ホテル祭」には、遠方からの来客もあり、会場となる旧大潮小学校は、1,000人近くの人で埋め尽くされる。「夏の体験交流」には、近隣の市から30～50人の子供たちが訪れ、錦川でのいかだ遊びや魚釣りなどを堪能し、「ヒガンバナ祭」には、住民が移植し手入れを続けてきたヒガンバナの鑑賞や餅つき、農産物の収穫体験などを目当てに毎年50人ほどが訪れ、住民と一緒に汗を流している。地区外から多くの人が訪れ、普段は静かな農村が賑わい、活気にあふれている。

「ホテル祭」など、規模の大きいイベントは住民総出で準備するため、地区内の交流も活発になり、高齢化が進む地区内の活性化の大きな要因となっている。

平成24年には、大潮地区の美しい風景や、そこで活躍する人々の姿を知って欲しいとの思いでフォトコンテストを開始した。10年間で二百数十点の応募があり、これまで気づかなかった美しい自然や伝統、生き生きと暮らす住民の様子を切り取り、発信する場ともなっている。撮影者が反復して地区に通い、地区への愛着を持つ人材づくりにも役立っている。

#### (5) 暮らしの安全確保

毎月第2土曜日、希望者に大潮田舎の店の弁当を、大潮の里をまもる会が届ける形で配食サービスを行っている。独居老人が増えるなか、地域で定期的に高齢者を見守る仕組みとなっている。あわせて、予防介護のためのサロン活動を継続している。

高齢化した住民が安心して暮らせるよう、防災研修会を開催し、いざという時の訓練も行っている。また、雪かきボランティア活動を実施し、非常時の安否確認や相互扶助の仕組みを設けている。



写真6 見守りを兼ねた配食サービス